

身近な存在である鏡川の魅力を再発見！  
「高知・鏡川 RYOMA 流域学校」最終発表会



2月18日（土）、高知大学朝倉キャンパス総合研究棟中庭にて「高知・鏡川 RYOMA 流域学校」最終発表会を実施しました。

今期の受講生12人（うち1名事前収録）が参加し、講座を通じての鏡川流域への意識の変化やまちのコインの活用、今後の関わり方について発表しました。当日は第1期生の方も聴講に訪れました。



最終発表会の前に12月の現地フィールドワークで訪問できなかった土佐山学舎4年生13名による総合的な学習の時間の成果発表を聞きました。小学生ながら堂々とした発表や手作りのパネルに受講生は感心しきり。発表後の質疑応答では、鏡川流域で学んだ者同士、世代の垣根を越えての交流となりました。

休憩を挟んで受講生による発表です。SNSに鏡川流域の写真を公開するなど気軽な関わり方から、趣味の楽器演奏や演劇と鏡川を結びつける、高齢者向けのまちのコイン利用のマニュアルづくりなど、「やりたいこと」や「できること」の延長で関わり方を考えました。中には夢産地とさやま開発公社の日曜市出店復活などすでに動き出しています。





発表後は受講生一人ひとりに対して、メイン講師の桑谷猛さんや講座メンターの中村圭二郎さんによる講評が行われました。それぞれの視点からのアドバイスが、今後の鏡川流域との関わり方に活かされることでしょう。最後に会場を提供していただいた高知大学地域協働学部の大槻知史先生から総評のコメントで最終発表会は閉会を迎えました。

閉会後は名残惜しさもあってか自然と焚き火を囲んで談笑の時間に。お互いの発表内容の感想を言い合うなど、発表の緊張も解けてリラックスした雰囲気でお話弾みます。他の受講生に「一緒に取り組んでみたい」と声をかけたり、講師・メンターや運営スタッフに今後について相談したりと、次第に熱が入る受講生もいました。



12月からスタートした鏡川流域内関係人口講座「高知・鏡川 RYOMA 流域学校」第2期。多くの受講生が地元に住んでいながら鏡川との接点がなかった状態からのスタートでしたが、講座を通じて自分らしい関わり方を見つけることができました。講座としては終了ですが、これをきっかけに受講生は多様な形で鏡川流域と関わり続けてくれることでしょう。

